現代語版『小説神髄』（三）

坪内逍遥著
坂井健訳

はじめに

『小説神髄』は、ごく簡単な擬古文で書かれているのだから、わざわざ現代語訳する必要はないし、近代文学を勉強しようとするものなら、当然、原書にあたって勉強するべきだというのは、なるほど、そのとおりだとは思うけれども、実際に、『小説神髄』を原書のまま読んで、正しく理解できる人は、大学四年生くらいでもごく少ないし、特に、この本を読んでほしいと思う大学二、三年生ではほとんど居ないといってもいい。そこで、いくらか無駄な仕事に属するかもしれないけれど、あえて『小説神髄』を現代語訳にすることにした。訳にまちがいや不適切な表現があるかもしれない。識者の叱正を乞う。

なお、注は、日本近代文学大系『坪内逍遥集』（中村完注釈、角川書店、昭和四九年一〇月）に詳細な注があるので、ここでは、最小限にとどめた。この注には、さまざまに教えられるところがあったので、記して、感謝の意を表したい。現代語訳の底本は、初版本（松月堂、明治一八～一九年）とした。

要するに、本稿は、岩波文庫『小説神髄』をもちながら、そのままでは理解しにくい初学者を主に念頭において訳したものである。

小説の主眼

小説の主眼は人情である。世態風俗がこれに次ぐ。人情とは、どんなものをいうのか。（答えて）曰く。人情とは、人間の情欲で、いわゆる百八煩悩がこれである。そもそも人間は情欲の動物なので、どんな賢人、良い人物であっても、これまで情欲をもたないものは、まれである。賢いか賢くないかの区別なく、誰でも情欲を抱いているものだから、賢者がつまらぬ人間と違う理由、善人が悪人と違う理由は、ただ、理性の力、もしくは、良心の力によって、情欲を抑制し、煩悩の犬を払うことによるばかりである。けれども、智力が非常に進んで、気格が高尚な人にあっては、常に劣情を包み隠して、その外面に現さないので、まるでその人は煩悩を完全に脱したようだけれども、その

人もまた感情を持った人間であるからには、どうして情欲がないことがあろうか。悲しんでも乱れることなく、楽しんでも感情に任せることなく、その節度を守ることができるばかりか、怒るべきことをも特に怒らず、恨むべきことをも恨まないのは、もともと情欲が薄いのではなくて、その人の理性の力が強いためである。こういうわけだから、外面に現して行なうことはあくまでも純正純良であるけれども、その行いをなすに先立って、幾多の劣情が心の中に湧き起こらないなどということがあろうか。その人の劣情と理性の力とが心の中でお互いに戦って、理性が劣情に勝つにおよんで、初めて善行をなすことができるのだ。あの神や聖人でない以上は、水が低い方へ流れるように、善を修めるものがあろうか。いくらか迷う心のあるのを、ちゃんと理性で抑えるからこそ、賢人とも君子とも言われるのだ。初めから迷いがなかったら、善を行なっても珍しくはない。君子、賢人などと言ったとしたら、かえってばかげたことであろう。だから、人間という動物には、外に現われる外部の行為と、内に隠れている思想と、二通りの現象があるべきはずだ。そして、内外、両方ともその現象は様々であって、人の顔のように違っているから、世に歴史があり伝記があって、外に現われた行為のようなものは、だいたいこれを写すけれども、内部に隠れている思想のようなものは、くだくだしくなってしまうので、写すことができたものは、これまでほとんどない。この人情の奥を究めて、賢人、君子は言うまでもなく、老弱男女、善悪正邪の心の中の内幕を、洩らすところなく描き出して、細かく詳しく、人情をはっきりと見えさせることを我々の仲間の小説家の勤めとするのである。かりに人情を写したとしても、その皮相だけを写したものは、まだこれを真の小説ということはできない。その奥底を究めるにおよんで、はじめて小説が小説である（姿を）見るのである。和漢に有名な小説作者たちは、ひたすら脚色が皮相にとどまるものをつたないといって、深くその奥底に入ることを努めたけれども、主眼とすべき人情を皮相を写して満足していた。どうして残念でないことがあろうか。小説作者のやり方は心理学者のようである。すべからく心理学の理屈に基づいて、小説の人物を創造するべきである。かりにも自分の考えによって、無理に人情に当てはまらない、いや、心理学に外れた人物などを創造したならば、その人物はもはやすでに人間世界のものではなく、作者の想像上の人物であるので、その脚色は巧みであっても、その物語が面白くても、これを小説ということはできない。ものに例えて言うなら、操り人形というものに似ている。少しだけこれを見ると、まるで多くの人物が活動しているようであるが、何度も熟視してみると、人形使いの姿も見え、仕掛けの具合もとてもよく分かって、興味が無くならざるをえない。小説も、また、これと同じで、作者が人物の背後にいて、しばしば糸を引く様子がはっきりと人物の挙動に見えたなら、たちまち興味を失うだろう。試みに一例をあげて言うなら、あの曲亭馬琴の傑作であった『南総里見八犬伝』[1]の中の八犬士のようなものは、仁義八行（仁義礼智忠信孝悌）の化け物で、決して人間とはいえない。作者の本意も、はじめから、例の八行を人間になぞらえて小説を作るつもりであるから、あくまで八犬士の行いを完全無欠のものにして、勧善懲悪の意味を寓したのである。だから、勧善懲悪を主眼

として『南総里見八犬伝』を評する時には、東西古今にその類の無い良い小説であると言うことができるが、他の人情を主眼としてこの物語を批評したならば、瑕のない宝石だと讃えることはできない。その訳はどういうことかというと、あの八主人公の行いを見よ。いや、行為はともかく、腹の中で思っていることさえ、徹頭徹尾道に適って、一度も劣情を起こしたことがない。まして一時一瞬といっても、心が乱れ、騒いで、あの理性の力と心の中で戦っていたためしもない。かりに堯や舜[2]の聖帝の世であったとしても、このような聖賢が八人までもそろって世に現われることは、ほとんど望みがたいことではないか。思うに、八犬士は曲亭馬琴の想像上の人物で、現世の人間の写実ではないので、この不都合もあったのだ。とはいっても、馬琴の非凡さは、見事に巧妙な意匠によって、そのこじつけを覆ったから、読者は少しもこれを知らず、見事に人情を究めていると褒め讃えたのは、まちがってはいないか。こういったからといって、『南総里見八犬伝』を小説ではないというわけではないが、今、例証として都合がいいために、しばらく人口に膾炙しているあの傑作を引用しただけだ。曲亭翁の著作については、私は、みずから別に論がある。それも折があれば説くこともあるだろう。だから、小説の作者たるものは、もっぱらその心を心理に注いで、自分が作った人物であっても、一度（小説の）篇中に現れた以上は、これを現実世界の人とみなして、その感情を写し出すのに、決して自分の考えによって善悪正邪の感情を作り出すことをせず、ただ、傍観してありのままに写実的に写す心得であるべきである。たとえば、人間の心を将棋の駒と見なす時には、そのまっすぐなことは、飛車のような感情も少なくないだろうし、行く道が常に横向きである心の角も多いだろう。桂馬のひょうきんな心、香車の考えなしの心、あるいは、王将の才に富んで、臨機応変の縦横無尽な行ないもあれば、ただ、進むべき前があることを知って、左右に避けるべき道を知らない、つまらぬ歩、凡庸な歩も少なくない。各自思い思いの行動をして、この世の中を渡るのだから、まっすぐな飛車も成長すれば、昔の飛車と同じではない。角も世故に長ずるに至ると、まっすぐな道を行くこともあるだろう。あるいは、王将もつまらぬ歩の手にかかり、あるいは、思慮のない香車であっても金銀を得ることもあるだろう。指し手は、造物主の翁であって、駒は、すなわち人間である。指し手の采配が不思議であることは、横から見るのとは大いに違っている。「あの金は、もうすぐあっちへ成りこみ、進んで王手となるだろう。」と思うのと違って、一つのつまらぬ歩にたちまち道をふさがれて、後退するべき暇さえなくて、桂馬の餌食となることもある。だから、人間もこれと同じで、栄達も落魄も必ずしも人間の性質に伴わないので、あるいは、才子であって業をなさないものもあるし、あるいは、凡庸な人物であって志を得る者もある。千の様、万の様子、千変万化、因果の関係がさまざまであるのは、あらかじめ予測することができない。だから、小説を書くにあたって、よく人情の奥を研究し、世の中のあり様の真実を知ろうと望むならば、まさに他人の将棋を見て、その局面の成り行きを人に語るようにするべきだ。もし、一言一句たりとも、横で見た助言を下すときには、将棋はすでに作者の将棋となって、他人の誰それたちが指した将棋とはいうことができない。

「ああ、このところはとても下手だ。自分だったらこうするだろう。こうこうにするべきなのに。」と思われるところも改めないで、ただ、ありのままに写してこそ、初めて小説とも言うことができるのである。およそ、小説と実録[3]とはその外観について見ると、少しも違いのないものである。ただ、小説の主人公は、実録の主人公と同じではなくて、完全に作者の考えから生まれた虚構・架空の人物であるだけだ。けれども、いったん出現して、小説中の人物となったならば、作者といえども、勝手にこれを進退させてはいけない。まるで他人のように思って、自然のなりゆきだけを写すべきである。あの勧善懲悪をもって主眼とした日本や中国の小説作者のように、このような感情は、この人物にふさわしくない。こんな情欲を出したならば、この人物の値打ちを下げてしまう。聖人君子に恥じない立派な人物にしておくのが一番だ、などと、作者が脇から見た小細工によって、登場人物の感情を折衷し、勧善懲悪という人が作った模型に造化の作用をはめ込むときには、その人情と世のありさまとは、すでに天然のものではなく、作者みずからが拵えた、あつらえ向きの人情であるから、その登場人物以外には、決して見ることのできない人情であるはずだ。そもそも小説の主人公は、もとより虚構のものであるから、完美にさせようと望むときには、作者の意匠の浮かんだままに、あくまですべて美にこしらえるのも、別に妨げるわけではないけれども、ただ、あらかじめ限度を設けて、人情の枠からはみ出ないように工夫を凝らすことが肝要である。たとえば、絵描きが意匠を凝らして、美人の肖像を描くときにも、ひたすら艶やかであろうと望んで、みだりにあるはずもない瞳を描き、または、眉や口の類なども人間らしくなく写し出すならば、その顔がどんなに美であっても、これを名画ということはできない。いや、名画ということはできようが、もっとも美しい「人間」を描いた名画とはいうことはできない。もし、もっとも美しい、未曾有の美人を描き出そうと望むならば、まず、その眉を描くにあたって、世に眉が美しいことで有名な美人の眉をひな形とし、そして、その眉を描くべきである。瞳についても、またそれと同じで、世に美しい瞳の誉れのある、美人の瞳を手本として、その瞳を写すべきである。鼻、唇はいうまでもない。顔の長短、髪の色つや、皆、世の中に存在するはずの人間から、そのひな形を取って来て、はじめて古今にかつてないもっとも美しい婦人を描くことができるのだ。もし、そうしないで、眉も口も、絵描きが自分勝手な想像から作りだしたものであるようなときには、これは人間の肖像ではなくて、人間以上、もしくは、また人間以下の肖像であるだろう。人物を虚構するにも、まず、そのように、あちらこちらにいる人間からその性格の基をもとめて、あわせてこれを一つのものとし、完美で全く善良な人物を小説中に作りだすのは（もし、その配合の方法・塩梅が心理学に外れている理由がない以上は）特に不都合なことではないが、決して人間界に望むことのできない、驚くべき、妙に偉い人物などを、作者が自分勝手な想像で虚構することは、忌むべきことである。前にもすでに述べたように、もともと小説は芸術であって、詩歌・伝奇などと同じものであるが、また、自然と詩歌・伝奇と違うところも少なくない。例えば、詩歌は、必ずしも写実を主眼としないけれども、小説は、常に写実によって、その

全体の根拠とし、人情を写実し、世のあり様を写実し、ひたすら写実するものを、実物に迫らせるように努めるものなのだ。小説が、まだ発達しないで、なおロマンスであったころには、その体裁も詩歌と同様であって、奇異なことを写していたが、いったん小説の体裁を備えて、今日の小説となったからには、ふたたび荒唐無稽な脚色を弄して、奇怪な物語を作り出していいわけがない。これこそが、今日の小説・稗史[4]が非常に難しい仕事である理由なのである。だから、登場人物を設定して、その感情を写したいと思うならば、まず、情欲というものをその人物がすでに持っていると仮に決めて、これこれの事件が起きて、こんな刺激を受けたならば、その人はどんな感情を起こすか。また、これこれの感情が起こったならば、その他の多くの感情には、どんな影響を引き起こすだろうか。また、それまでの教育や仕事の性質によって、その人物の性格はもちろんのこと、その感情の作用にもどのようなちがいを生じるかと、実に細やかに探り、写して、外面に現れない、本当の心をはっきりと外面に見えさせるようにするべきである。もし、人物が善人で、いわゆる実事師[5]というものであったなら、作者は努めて実事師がそのおりおりにきっと感じるはずの感情だけを描写して現わし、もし人物が悪役であったならば、ひねくれた心に抱くにちがいない感情だけを写すべきである。けれども、これをするに当たって、善人にも、なお、煩悩があり、悪人にも、なお、良心の心があって、その行ないをするに先だって、いくらかためらうこともあるのを、洩らして、写し出さなかったならば、これはまた皮相の状態であって、真実を表現しきっていないものというべきだ。聞くところによると、熱心な油絵師は、刑場などにも出向いて、切られるものの顔形はもちろん、首切り役人の腕の動き、また、筋骨の張っている様子にも、眼を注いで、観察するとか。小説作者も、まず、そのように、性質の醜いものも、感情がよこしまであるものも、決して忌み嫌うことをせずに、心をこめて写さなかったならば、どうして人情の真実に入ることができようか。だからといって、淫猥で下品になるような、奥深く隠されている劣状までも写し出せよというわけではない。思うに、小説は芸術であるので、あの音楽でみだらな曲を忌み、絵画で猥褻な姿を嫌い、また、詩歌伝奇で野卑な言葉を使うことを憎むように、卑猥なことを語るのを嫌うからである。英国の物知りであるジョン・モーレイ[6]のジョージ・エリオット女史[7]の著作を評した言葉[8]に言うことに「（上略）すべて文学の主旨・目的は、人生の批判（クリティシズム）をしようとするためであると、昔の識者[9]はいった。小説は、もともと文壇の一大美技であるとも称えるべきなのに、かえってしばしばいやしめられて、最下位にその位置をしめるのは、そもそもまたどういうわけか。思うに、人生の批判と見ることのできる小説がまれであることによることだろう。世の中に小説家は多いけれども、造物主が文才を人間に与える時、配合は一律ではないから、見識の浅いものがあり、意匠の足らないものがある。大体について、批評を下すときには、一大奇想の糸を繰って、たくみに人間の感情を織りなし、限りなく窮まりない、隠れた不可思議な原因から、また、限りなく定まりない種々雑多な結果をも、とても美しく編みだして、この人生の因果の秘密を、眼で見るように、とてもはっきりと説明した著作は少ない。

およそ人生の楽しみは、その種類はきわめて多いが、中にも人間の性質の秘密を解き明かし、因果の道理を悟り得ることほど世に面白いことはないだろう。そうではあるが、人生の大からくりをとても詳細に悟ることができるのは、もともと容易ではないことなので、知識が浅く才能のない小説家がよくすることのできるはずはないのだ。その才能が衆人の上に抜きん出て、くじけない気力を持つ者だけが、ただこのことをすることができるだろう。総じて文壇の技術に、やや高等な位置を占める者は、この人生の大からくりを悟ることをもって主眼とし、または目的としないことはない。宗教といい、詩歌といい、哲学といい、その名によって形こそ違え、その主旨とするところを問うと、すべて人間に関するものであって、その性質と運命とはどのような自然の仕掛けによって、どのような具合に働くかを、残る隈なく解き明かして、世間の人の迷妄を解き、また、疑いの雲をも払って、好奇の癖を慰めることにある。人がこういった本を読んだなら、かりにその深いことわりを理解することができなくても、やはり、人生の批評記は興味深いものであることを感じるから、読むのをやめることはできないだろう。愚かで学問のない連中にあっては、これらの書籍を読んだとしても、そのために自ら悟りを開いて、反省し、物事のよしあしを判別するには至らなくても、物事の曲直、是非、当否は、おぼろげながらに判断できるだろう。（中略）エリオット女史の小説は、このような観念の畑へさえも読者を導く近道なのだ。けれども、女史は独断によって、この行いは良いことである、この行いは悪いことであるなどと、これまで指定することを好まず、ただ、はっきりと物事の因果を見えるように書き現わして、褒めるか貶すか、取り入れるか、取り入れないかは、すべて読者の心に任せたのだった。女史は、ちょうど人の心に種を蒔くもののようである。自ら収穫を収めないで、他人がこれを拾うのに任せて、少しもうらやんでいる様子もない。」云々と言っている。ほんとうにモーレイ氏の言っているように、仮にも文壇の上に立って、著作家となろうと望むものは、常に人生の批判をもって、その第一の目的とし、そして、筆を取るべきである。

だから、小説は、見えにくいものを見えさせ、おぼろげなものを明瞭にし、かぎりない人間の情欲を、かぎりある小冊子のなかに網羅し、これを楽しむ読者に自然に反省させるものである。造物主は、天地のすべてを創造して私心がない。ちょうど私の主張する小説の作者が様々な人物を創り出して、すこしも偏りや愛憎がなく、行き、とどまり、進退すること、すべて皆ひたすら自然から離れないように写し出しているのと似ている、ということができる。それはともかく、造化の神が作り出した実際世界は、きわめて広大無辺であって、規模があまりに大きいので、凡庸で、幼く、愚かな眼によっては、原因結果の関係を悟ることができることは、ひじょうに難しい。それを、私の主張する小説作者は、その因果の理法の要点を取り出して、一小冊子のなかにまとめて、点検取捨する便利のために提供する。その任は、どうして重くないことがあろうか。もし、うまく功をなすことがあったならば、その功もまた偉大ではないか。

ちなみに言う。本居大人[10]が『玉小櫛[11]』の中で、『源氏物語』の

主旨を論じて言うことには、この物語の主旨は、昔からいろいろな説があるが、すべて物語というものの本旨を求めないで、ただ世の普通の儒教、仏教などの書物の趣旨によって論じられているのは、作者の本意ではない。たまたま彼の儒教、仏教などの書物と自然と似ているところ、一致している趣旨もあるけれど、それを捉えてすべてを言うべきではない。ほとんどの趣旨は、こうした類とは非常に異なるもので、すべて物語には、また別に、物語の一つの趣旨があるものであって、はじめにも少し言ったととおりである。（中略）『胡蝶』の巻に言うことには、「昔物語をご覧になるにも、だんだんと人のありさまは、世の中のありさまをお見知りになる」と云々。すべて物語は、世の中にあること、人のありさま、心をさまざまに書いたものであるから、読むと自然と世の中のありさまをよく理解し、人の行ない、心情の現象をよくわきまえ知る。これこそが物語を読もうとする人の主要な目的だと思うべきことだよ。（また略）それなら、物語で人の心、行ないが良い悪いとはどういうことかというと、だいたい物のあわれを知り、情けがあって、世の中の人の心にかなっているものを善しとし、物のあわれを知らず、情けがなくて、世の中の人の心にかなわないものを悪いとしている。このようにいうと、儒教、仏教などの道の善悪とそれほど違わない区別のようであるけれども、細かくいうならば、世の中の人の心に適うことと適わないこととのなかにも、儒教、仏教の善悪と合わないものも多い。また、すべて善悪を定めるのも、ただ、なだらかに、やわらいで、儒者などの議論のように、ひたすらに迫っていることはない。さて、物語は、ものあわれを知ることを中心ともしているが、その筋に至っては、儒教、仏教の教えに背いていることも多いことであるよ。それは、まず、人の心がものに感ずることには、善悪正邪、様々ある中に、道理に外れていることには、感じてはいけないことではあるが、心は、自分ながら、自分の心のままにならないことがあって、自然と、抑えることのできないところがあって、感ずることもあるものである。源氏の君の上でいうなら、空蟬の君、朧月夜の君、藤壷の中宮などに心をかけ、お会いになったことは、儒教、仏教などの道でいうならば、世にこれ以上ない、ひどい不義悪行なので、どれほどのいいところがあったとしても、善人とはいうことができないはずなのに、その不義悪行であることを、それほど取りたてて言わないで、ただ、その間の、もののあわれの深いことを、繰り返し書き述べて、源氏の君をもっぱら良い人の手本として、あらゆるすばらしことをこの君の上に取り集めている。これが物語の本意であって、その良い、悪いは、儒教、仏教などの善悪と、ちがいのある区別である。そうはいっても、あのような不義を良いとするのではない。その悪いことは、今さら言うまでもなくはっきりしていて、その類の罪を論ずることは、もともとその方面の書物が世に多くあるので、あまり関係のない物語に期待するべきではない。物語は、儒教、仏教などの、厳格な道のように、迷いを離れて、悟りに入ることのできる法則でもない。ただ、世の中の物語であるので、そういった筋の善悪の論

は、しばらく差し置いて、あまりこだわらないで、もののあわれを知っている方がいいことを、取りたてて良いとしたのである。この考えを、ものに例えて言うならば、蓮を植えて観賞しようとする人が、濁って汚くはあるけれども、泥水を貯えるようなものだ。物語に不義の恋を書いているのも、その濁った泥を愛でてではなく、もののあわれの花を咲かそうとする材料なのであるよ。源氏の君の振る舞いは、泥水から生まれ出た蓮の花の、世にすばらしく咲きにおっている類であって、その水の濁っていることは、取りたてて言わず、ただ情け深く、もののあわれを知っている方を、取りたてて、立派な人の手本にしたこと云々と言っている。[12]

右に引用した議論のようなものは、非常に小説の主旨を理解して、うまく物語の性質を説き、明らかにしたものというべきだ。わが国にも、先生のような活眼の読者もないわけでもなかったけれど、それはめったになくて、稀なので、他のまちがった学者に間違えさせられて、あの『源氏物語』さえ、こじつけて勧善懲悪が主旨であるものであるなどと、とてもしたり顔で講釈する国文学者も多いと聞く。まったくはなはだしく間違っているではないか。

〔注〕

（1）『南総里見八犬伝』・曲亭馬琴作。犬に関わる前世の因縁で結ばれ、仁義礼智忠信孝悌の玉をそれぞれ一つずつ持つ八勇士が、紆余曲折を経ながらも、めぐり合い、里見家につかえて大活躍をするという長編小説。勧善懲悪小説の代表作。

（2）堯や舜・「堯」、「舜」ともに中国の神話上の君主。徳治政治を行なったとされ、儒教における理想の聖君主とされた。

（3）実録・実録物。実際にあった事実に空想を交えて描いた小説。

（4）小説・稗史・小説は、虚構によって作り出された物語、稗史は小説風の歴史書を指し、いちおうは区別されるが、ここでは、「小説」も「稗史」もほとんど同義。同じ意味の違った言葉を重ねて使う、漢文脈によくみられる用法である。

（5）実事師・「じつごとし」。歌舞伎で、分別があり、誠実な人物を演じる役者。

（6）ジョン・モーレイ・John Morley(1838-1923)イギリスのジャーナリスト。一九世紀イギリスの代表的雑誌 The Fortnightly Review の編集長を務める。のち、政治家に転ずる。

（7）ジョージ・エリオット・George Eliot(1819-1880)イギリスの女流作家。日常生活に密着した作風で知られた。

（8）ジョン・モーレイのジョージ・エリオット女史の著作を評した言葉・未詳。モーレイが一八六七年から一八八二年にかけて編集等を務めた The Fortnightly Review の創刊号（一八六五年）から、一八八六年までの記事を見たが、当該の記述は見当たらなかった。また、モーレイの評論集 Critical Miscellanies（一八七一年）に The Life of George Eliot という論文があるが、この中にも、当該の記述と一致する部分は見られなかった。

（9）未詳。

（10）本居大人・本居宣長（もとおり・のりなが　一七三〇～一八〇一）江戸時代の国学者。実証的な方法で古典の注釈、解読を行なった。国学の大成者として名高い。

（11）玉小櫛・『源氏物語玉の小櫛』（げんじものがたりたまのおぐし　一七九六）宣長による『源氏物語』の注釈書。「もののあはれ」を知らせることに物語の主旨があるとする。

（12）この物語の主旨は、昔からいろいろ説があるが…もののあわれを知っている方を、取りたてて、立派な人の手本にしたこと・以上は、『玉

の御櫛』の「大むね」（主旨）からの引用。

（さかい　たけし　日本文学科）

二〇一二年十一月十四日受理